

神楽坂かぐら連

創連50周年に寄せて



連長

松井 比佐子

鳴り物・三味線

1974年に神楽坂通り商店会にて結成された当連は、2024年の今年、記念すべき創連50周年を迎えることができました。現在は、下は4歳から上は80代まで、老若男女約140名の連員が日々練習を重ねています。そして今年の東京高円寺阿波おどりでは「東京都議会議長賞」「青梅市友好賞」という、50周年にふさわしい2つの賞をいただくことができました。

かつてのかぐら連で活動していたメンバーがそれぞれ独立して新しい連を立ち上げるなど、かぐら連は様々に形を変えながら活動を続けてきましたが、ここ数年はそのような神楽坂界隈の連と共演する機会も増え、神楽坂の阿波おどりが益々盛り上がってきていると感じます。

来年は創連51年目という新たなスタートを切ることになりますが、姉妹連である天狗連や中村橋新連の踊りや音を目指し、弛むことなく、連員一同精進して参ります。



副連長

駒場 大輝

男踊り・部長



副連長

北村 桂子

女踊り・部長



副連長

福士 潤

鳴り物・部長

かぐら連創立50周年！！このような節目の年に連員として迎えられたこと大変嬉しい思います。
ご支援頂いている皆様はじめ、支えていただいている連員皆さんに改めて御礼申しあげます。これからも皆様に喜んでいただける連にしていきたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

そして男踊りメンバー！！

今年は更に“熱く、楽しい”踊りをモットーに精進し、かぐら連を踊りから引っ張っていきましょう！！

神楽坂の地域に根付いている阿波踊り。私は愛日小に通う娘のおかげで阿波踊りに触れ、娘・息子と一緒に入連。今も親子一緒に同じ趣味を持てた事に感謝しています。阿波踊りを楽しみながら、連員やご覧くださる皆様を笑顔にしていきたいと思っています。神楽坂かぐら連が50周年まで続けてこれたのは沢山の先輩方や地域の方、ご指導くださった姉妹連の方々のおかげだと大変感謝しております。携わつてくださった多くの方々の想いを大切に、これからも神楽坂かぐら連が続いていくよう精進して参ります。

連Tシャツ



神楽坂かぐら連の主な出演

神楽坂エリアの出演

- 神楽坂まつり 阿波おどり大会
- 神楽坂まち飛びフェスタ
- 牛込簞笥町まつり UTC オンステージ
- 牛込警察署 交通安全パレード（春・秋）
- 津久戸小学校阿波踊り大会 応援
- 神楽坂化け猫フェスティバル（あにや踊り）

海外出演

- フォーコロア・フェスティバル
- / Lefkada ギリシャ 民族舞踏レフカダ訪問団
- ヴェネチアカーニバル阿波踊り
- / Venezia イタリア 日伊親善交流団
- フランス・パリ遠征 / 新宿区

その他の出演

- 連員結婚式
- 特別養護老人ホーム慰問
- 新宿区保育園夏祭り
- 企業・県人会等のパーティー
- 津久戸小学校120周年式典

神楽坂かぐら連 創連50周年記念誌

2024年11月発行

発行者 神楽坂かぐら連創連50周年実行委員会
取材(資料)協力 神楽坂通り商店会、神楽坂コモンズ、山下弘子氏、他多数

カバーイラスト 芦谷 耕平氏
写真撮影 祖父江司氏、他多数



神楽坂かぐら連
50年 の あゆみ



はじまりの時期

神楽坂がひとつになる新しいイベントを

昭和40年代中頃、神楽坂の街は飯田濠再開発計画に揺れていきました。歴史的な外濠の景観や遊水地としての機能を守りたいという想いと、大型商業施設(現在のラムラ)の建設を足掛かりに新しい都市の活性化を目指す、というはざまの時代でした。ともすれば意見が分かれて紛争になりかねない状況の中、「今こそ神楽坂が団結すべき」という当時の商店会役員らの呼びかけで、新しいイベントの検討を始めました。

第1回「神楽坂阿波おどり」開催

徳島の「天恵連」「娘茶平連」から約30名の演者を誘致して開催。当時の神楽坂通りの街灯は暗かったこともあり、夕方のまだ明るい午後5時から1時間のイベントだった。



はじめての阿波おどり開催にあたり、商店会役員が東京駅の大丸デパート内の徳島県物産斡旋所に相談をした。そこで徳島新聞社東京支社の阿波おどり担当者を紹介され、折衝の結果、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。



神楽坂阿波おどり開催、そして「かぐら連」の創立に深く関わった山下東氏。奥様の弘子氏とともにかぐら連をゼロから立ち上げた生みの親。初代連長の河合氏とともにかぐら連の礎を築いた。

「かぐら連」誕生

春にお囃子の楽器を購入して以降10回にわたる練習を経てなんとか合奏ができるようになり、第3回阿波おどり大会で地元「かぐら連」が正式にデビュー。女踊りの着付けは「天狗連」に習ながら商店主の奥方たちが担当した。商店の2階で汗を流しながら慣れない手つきで全員に着付けたという。子どもの衣装はなく、大人用をお腹周りにたっぷり巻きつけての着付けだった。



第2回神楽坂阿波おどり後、地元連結成に向け始動

2年目は2日間の開催で徳島の「うずき連」に加え、高円寺の「天狗連」「飛鳥連」「花菱連」「葵新連」などが参加。地元からは東京神楽坂組合、津久戸みづき会、第一勧業信用組合などから踊り手の参加を受け付け、大いに盛り上がった。



山下漆器店 山下東氏
神楽坂阿波おどり開催、そして「かぐら連」の創立に深く関わった山下東氏。奥様の弘子氏とともにかぐら連をゼロから立ち上げた生みの親。初代連長の河合氏とともにかぐら連の礎を築いた。

活動拡大の時期

30余年にわたり連長を務めた歴代最長の連長。山下東氏

一致団結を第一の目的に掲げたので、盆踊りのように一ヵ所に人が集まるイベントではなく、みんなが労力と費用を均等に出し合って、さらに恩恵を受けるように、神楽坂の坂下から坂上までお客さんで一杯になるようなことを、と発案されたのが阿波踊りだったのです。大名行列や郡上踊りという案も出ましたが、神楽坂に近い牛込見附の大名普請を江戸時代初期に担当したのが、阿波徳島の峰須賀家だったという故事にも因み、阿波おどりが選ばれました。

衣装の変革

創立当初の女踊りの衣装は赤いオコシに赤いタスキ。雨の日には色落ちてしまい大惨事になった。



河合連

春にお囃子の楽器を購入して以降10回にわたる練習を経てなんとか合奏ができるようになり、第3回阿波おどり大会で地元「かぐら連」が正式にデビュー。女踊りの着付けは「天狗連」に習ながら商店主の奥方たちが担当した。商店の2階で汗を流しながら慣れない手つきで全員に着付けたという。子どもの衣装はなく、大人用をお腹周りにたっぷり巻きつけての着付けだった。

天狗連の姉妹連になる

指導を仰いだ「天狗連」と姉妹連になる。当時の中村連長には何度も神楽坂に足を運んでいたが、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。

中村連長

はじめての阿波おどり開催にあたり、商店会役員が東京駅の大丸デパート内の徳島県物産斡旋所に相談をした。そこで徳島新聞社東京支社の阿波おどり担当者を紹介され、折衝の結果、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。

第2回神楽坂阿波おどり後、地元連結成に向け始動

2年目は2日間の開催で徳島の「うずき連」に加え、高円寺の「天狗連」「飛鳥連」「花菱連」「葵新連」などが参加。地元からは東京神楽坂組合、津久戸みづき会、第一勧業信用組合などから踊り手の参加を受け付け、大いに盛り上がった。

河合連

その一方、正式な「連」としての地元チームの育成が課題に。高円寺天狗連の指導のもと、8人の商店主と10人の子どもたちが毘沙門天で練習を開始。お囃子は主に商店会役員が担った。

映画「BU・SU」公開

「神楽坂阿波おどり」の様子が劇中に登場。かぐら連もエキストラとして参加。

『神楽坂通り連』

かぐら連とともに「BU・SU」の劇中に登場する「仲通り連」は、河合連長監修のもと神楽坂通り商店会の連として立ち上げられた。助六(石井要吉)とよしのり(小林千鶴)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

ほおづき市

「ほおづき市」が始まる
開催当時は主に露天商がお店していた。

『神楽坂仲通り連』

かぐら連とともに「BU・SU」の劇中に登場する「仲通り連」は、河合連長監修のもと神楽坂通り商店会の連として立ち上げられた。助六(石井要吉)とよしのり(小林千鶴)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

子供阿波おどり大会が始まる

文化の普及と商店会の盛り上がりのために、本大会には特に子ども阿波おどり大会を開催。当時商店会役員兼津久戸みづき会PTA会長であった助六(石井要吉)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

2019年神楽坂まち飛びフェスタで「秋の阿波おどり」を開始

まちの文化祭「まち飛びフェスタ」は、もとは1999年(H.11)、沈滞ムードにあった神楽坂を何とか活性化させようとする「まちおこし」から始まった。当時発足した実行委員会が神楽坂に息づく芸術性に着目し、「まちに飛びだした美術館」として企画。700mにもわたる「坂にお絵描き」からもわかるように、神楽坂のイベントは常に「神楽坂通り全体」を主軸に置いている。神楽坂かぐら連もイベントの一環として阿波おどりを披露していたが、主催者の意図に賛同。2019年からは神楽坂界隈の連とも協力しながら「秋の阿波おどり」を開催。合同流し演舞を行うなど元一体型の活動に賛同している。

助六 石井要吉さん

活動拡大の時期

ギリシャ(レフカダ)遠征

30余年にわたり連長を務めた歴代最長の連長。山下東氏とともに、創立から海外遠征に至るまで連を大きく育てた。当時坂上交差点には「河合陶器店」と「山下漆器店」が肩を並べていた。商店の2階は祭りの際、女性更衣室や休憩室として使われていた。

衣装の変革

創立当初の女踊りの衣装は赤いオコシに赤いタスキ。雨の日には色落ちてしまい大惨事になった。

河合連

春にお囃子の楽器を購入して以降10回にわたる練習を経てなんとか合奏ができるようになり、第3回阿波おどり大会で地元「かぐら連」が正式にデビュー。女踊りの着付けは「天狗連」に習ながら商店主の奥方たちが担当した。商店の2階で汗を流しながら慣れない手つきで全員に着付けたという。子どもの衣装はなく、大人用をお腹周りにたっぷり巻きつけての着付けだった。

天狗連の姉妹連になる

指導を仰いだ「天狗連」と姉妹連になる。当時の中村連長には何度も神楽坂に足を運んでいたが、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。

中村連長

はじめての阿波おどり開催にあたり、商店会役員が東京駅の大丸デパート内の徳島県物産斡旋所に相談をした。そこで徳島新聞社東京支社の阿波おどり担当者を紹介され、折衝の結果、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。

第2回神楽坂阿波おどり後、地元連結成に向け始動

2年目は2日間の開催で徳島の「うずき連」に加え、高円寺の「天狗連」「飛鳥連」「花菱連」「葵新連」などが参加。地元からは東京神楽坂組合、津久戸みづき会、第一勧業信用組合などから踊り手の参加を受け付け、大いに盛り上がった。

河合連

その一方、正式な「連」としての地元チームの育成が課題に。高円寺天狗連の指導のもと、8人の商店主と10人の子どもたちが毘沙門天で練習を開始。お囃子は主に商店会役員が担った。

映画「BU・SU」公開

「神楽坂阿波おどり」の様子が劇中に登場。かぐら連もエキストラとして参加。

『神楽坂通り連』

かぐら連とともに「BU・SU」の劇中に登場する「仲通り連」は、河合連長監修のもと神楽坂通り商店会の連として立ち上げられた。助六(石井要吉)とよしのり(小林千鶴)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

子供阿波おどり大会が始まる

文化の普及と商店会の盛り上がりのために、本大会には特に子ども阿波おどり大会を開催。当時商店会役員兼津久戸みづき会PTA会長であった助六(石井要吉)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

2019年神楽坂まち飛びフェスタで「秋の阿波おどり」を開始

まちの文化祭「まち飛びフェスタ」は、もとは1999年(H.11)、沈滞ムードにあった神楽坂を何とか活性化させようとする「まちおこし」から始まった。当時発足した実行委員会が神楽坂に息づく芸術性に着目し、「まちに飛びだした美術館」として企画。700mにもわたる「坂にお絵描き」からもわかるように、神楽坂のイベントは常に「神楽坂通り全体」を主軸に置いている。神楽坂かぐら連もイベントの一環として阿波おどりを披露していたが、主催者の意図に賛同。2019年からは神楽坂界隈の連とも協力しながら「秋の阿波おどり」を開催。合同流し演舞を行うなど元一体型の活動に賛同している。

助六 石井要吉さん

変革の時期

二代目連長就任

レフカダ島出身の作家、小泉八雲(パトリック・ラフカディオ・ハーン)が日本に帰化し晩年を新宿区で過ごしたこと縁に、新宿区とレフカダ市は友好都市提携を結んでいる。小泉八雲は日本の伝統文化の研究、執筆にも熱心であり、それを受けた新宿区は「民族舞踏レフカダ訪問団」をレフカダ市に派遣した。阿波おどりもその一つとして加わり、「津久戸みづき連」「郵便連」「でんわ連」「つつじ連」他企業連とともに、かぐら連からも10名の連員が参加。「新宿連」としてイオニアア海の小さな町で「ヤットサー」の声を響かせた。

衣装の変革

創立当初の女踊りの衣装は赤いオコシに赤いタスキ。雨の日には色落ちてしまい大惨事になった。

河合連

春にお囃子の楽器を購入して以降10回にわたる練習を経てなんとか合奏ができるようになり、第3回阿波おどり大会で地元「かぐら連」が正式にデビュー。女踊りの着付けは「天狗連」に習ながら商店主の奥方たちが担当した。商店の2階で汗を流しながら慣れない手つきで全員に着付けたという。子どもの衣装はなく、大人用をお腹周りにたっぷり巻きつけての着付けだった。

天狗連の姉妹連になる

指導を仰いだ「天狗連」と姉妹連になる。当時の中村連長には何度も神楽坂に足を運んでいたが、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。

中村連長

はじめての阿波おどり開催にあたり、商店会役員が東京駅の大丸デパート内の徳島県物産斡旋所に相談をした。そこで徳島新聞社東京支社の阿波おどり担当者を紹介され、折衝の結果、徳島の連と出演依頼の契約を交わした。上京した演者を椿山荘や日本劇場(通称: 日劇)に招待してもらいました。

第2回神楽坂阿波おどり後、地元連結成に向け始動

2年目は2日間の開催で徳島の「うずき連」に加え、高円寺の「天狗連」「飛鳥連」「花菱連」「葵新連」などが参加。地元からは東京神楽坂組合、津久戸みづき会、第一勧業信用組合などから踊り手の参加を受け付け、大いに盛り上がった。

河合連

その一方、正式な「連」としての地元チームの育成が課題に。高円寺天狗連の指導のもと、8人の商店主と10人の子どもたちが毘沙門天で練習を開始。お囃子は主に商店会役員が担った。

映画「BU・SU」公開

「神楽坂阿波おどり」の様子が劇中に登場。かぐら連もエキストラとして参加。

『神楽坂通り連』

かぐら連とともに「BU・SU」の劇中に登場する「仲通り連」は、河合連長監修のもと神楽坂通り商店会の連として立ち上げられた。助六(石井要吉)とよしのり(小林千鶴)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

子供阿波おどり大会が始まる

文化の普及と商店会の盛り上がりのために、本大会には特に子ども阿波おどり大会を開催。当時商店会役員兼津久戸みづき会PTA会長であった助六(石井要吉)が主導した。近隣小学校、幼稚園、保育園の子どもたちが参加し、2024年には子ども約1,000人が踊る一大イベントに。

2019年神楽坂まち飛びフェスタで「秋の阿波おどり」を開始

まちの文化祭「まち飛びフェスタ」は、もとは19